

【与謝野町】

1 人 1 台端末の利活用に係る計画

1. 1 人 1 台端末をはじめとする ICT 環境によって実現を目指す学びの姿

与謝野町では、平成 27 年度に「与謝野町教育大綱」を策定し、重点目標の一つとして「質の高い総合的な学力の育成」を掲げています。この中で特に令和 5 年度の第三次改定においては、多様な他者とつながるためのコミュニケーション力を育み、今後、人工知能（AI）が飛躍的な進化を遂げる未来社会においても主体的・創造的に生きることができる資質や能力を育成することを目標としています。

この目標の実現に向けて、学校や児童生徒の実情を踏まえた上で、学習効果を高めることにつながるクラウド環境の整備や、新たな教材やアプリを積極的に導入していきます。それらを生かしながら学習者が自律的に他者とかかわり合い学びを進めていく中で、タブレット端末を有用な道具の一つとして活用場面や活用方法等を自己選択して活用し、課題解決に向かうことができる授業をとおして認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ教育を推進していきます。

2. GIGA 第 1 期の総括

（1）経緯と現状

与謝野町では、GIGA スクール構想に基づき、令和 3 年度に小・中学校の児童生徒に 1 人 1 台端末及びネットワーク機器を整備しました。また、デジタル教科書やドリル教材、学習支援ツールなどタブレット端末を用いて活用できる教材等も導入し、学校現場において ICT を積極的に活用できる環境を整えてきました。

令和 4 年度からは、端末の持ち帰りルールを整備し、家庭学習においても端末を日常的に活用できるように進めています。さらに、校務 DX の推進や「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を実現させられるよう、授業観や指導観の転換を図るための研修やアプリケーション、タブレット端末の操作に関する研修などを行い、教職員のスキルアップと指導力向上に力を入れてきました。その中で、児童生徒にとってタブレットを使うことが特別なことではなく、学びを進めるための 1 つの「道具」として、児童生徒自身が活用場面や方法を選択しながら学ぶ姿も増えてきています。

令和 6 年度の全国学力・学主状況調査の質問紙調査の結果により、ICT 機器の活用についての質問においては全国平均を上回る項目が多くありました。

（2）課題

- ・授業や校務における ICT 活用実態について、学校間、教職員間で差があることが課題として挙げられます。
- ・個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ学力向上につなげるために、さらに ICT の効果的活用が進む環境を整備する必要があります。また、ICT を活用することで教員の負担軽減を進め、教材研究など児童生徒に向き合う時間を確保し、授業改善をすることが課題として挙げられます。
- ・不登校や体調不良により欠席した児童生徒への授業配信は行っていますが、不登校児童生徒や特別な支援を要する児童生徒への支援の充実については課題となっています。

- ・教育支援設備として、大型提示装置の更新が課題となっています。令和7年度以降に大型提示装置（電子黒板等）の整備を計画していきます。

3. 1人1台端末の利活用方策

与謝野町では、GIGAスクール構想第2期において、端末を更新し、児童生徒1人1台の端末環境を引き続き維持します。その効果的な利用促進に向けて、以下の取組を進めていきます。

また、第1期で明らかになった課題を踏まえ、端末の利用や運用の質を向上させるための具体的な対策と改善策を検討していきます。

(1) 全ての学校で1人1台端末をより積極的に活用するために

教職員がICT活用の目的を理解し、ICT活用指導力を向上できるよう、引き続きICT活用に関する研修を計画的に実施します。その際、各学校のICT担当の教職員で構成しているICT推進委員会との連携を密にし、公開授業などをとおして目指す授業の在り方について協議したり、各校の実践例を紹介したりする中で、各校課題の解決につながるよう研修を充実させていきます。また、家庭での持ち帰りが進み、家庭学習と授業とを効果的につなげている町内の事例等をクラウドサービス等を通じて発信し、持ち帰りを日常化する支援をします。さらに導入しているAIドリルの活用にも学校間格差があることから、一人一人の課題や興味関心に合わせて学べるよさについての認識が進むよう、使い方等基礎的な部分からていねいに支援していきます。

(2) 個別最適・協働的な学びの充実を図るために

全ての学校において、学習課題の解決に向けて児童生徒が自らの学習を調整し学びを進めていくために、端末を1つの道具として児童生徒自身が活用場面や活用方法を選択していけるように授業改善を進めます。また、AIドリルに加えAI英会話アプリの導入を段階的に進め、個別最適な学習環境を提供し、学習習慣の定着と学力向上に一層取り組んでいきます。

端末活用の蓄積は学習履歴にもなるため、自身の学習データを利活用することや、教職員の負担軽減につなげ、児童生徒と向き合う時間の確保を図ります。

(3) 全ての児童生徒の学びを保障するために

1人1台端末によって、教師と児童生徒がつながり、児童生徒同士がつながることで、教職員は児童生徒の「学びの伴走者」としての役割を一層意識できるようにしていきます。そして、適切な資料提示や学習状況のモニタリングをとおして、一人一人の状況に応じた学びを支援し、保証します。

不登校児童生徒への支援については、家庭から授業に参加できる仕組みの整備や、AIドリルやAIアプリを活用した多様な学習機会の提供に一層取り組んでいきます。

特別な支援を要する児童生徒に対して、各学校で認知機能を高めるドリル教材を活用したり、デジタル教科書の文章にルビを振って読みやすくできるようにしたりするなどの支援を継続し、さらに充実させます。